職業：達磨

壊れた肉穴アーカイブ

四肢欠損・拘束・機械姦

基本１０枚その他差分
テキスト込み４２ｐ

サイバネティクス技術の広がりにより、
身体改造が一般的となった時代。

その中で産まれた四肢の無い、達磨の娼婦たち。

彼女らは自らの意思で改造を受け、性的な機能を施され
多額の報酬のために、買い手の下で従事する。
その先に待ち受けるのは、快楽に塗りつぶされる日々。

その中には、再生医療とカウンセリングでも
決して元の生活には戻れないほど壊れてしまう者も居る。

彼女もまた、そんな一人……

管理番号２０５０３２

名前：■■　■■■

年齢１８歳
身長１６７㎝
体重５４ｋｇ

契約期間：未定

感度検査
N///
C//
G//
P///
A//

改造実施内容
・四肢切除
・各部感度向上クラスA
・乳房肥大化
・常時発情
・膣拡張
・膣内神経増加
・尿道拡張
・膀胱拡張
・肛門拡張
・疑似前立腺移植
・消化器簡素化
・分泌液増加
・口淫用インプラント
・味覚変更

派遣先の希望
・なるべく高額なところ
・使用方法の条件は一切なし

改造後の経過日数

現在　７２６５日

「お、あった……すいません先輩
お休み中にに電話しちゃって」

『気にすんなって。あとその近くに
達磨娼婦用のケースあったはずだから
それに詰めて送ればいいよ』

「りょーかいっす！
でも、どうしてこんなのがうちの倉庫に？」

『あー、お前入ったの最近だもんな。
前の社長が社員の慰安用にって
安くなった達磨娼婦を買ってきたんだけど
神経焼き切れてぶっ壊れてんよな、それ』

「へぇ……じゃあ、
送る前にちょっと使ってもいいすか？」

『別に良いけど、
何も反応しないぞそいつ』

「いやー最近溜まってるんすよ…
もう穴なら何でもいいって言うかw」

『はぁ……好きにしな
あぁそうだ、そんな溜まってるなら
行きつけのセクサロイド風俗
お前に教えてやろうか？』

「え、マジすか？
いやぁ先輩は本当に優しいなぁ
尊敬するっすよ！」

『もっと他のところで尊敬しろっての』

職業：達磨

壊れた肉穴アーカイブ

達磨娼婦を買った。

市役所職員の俺の給与でも
無期限の月額契約で買えるほど安くなった達磨娼婦。

肌はきれいに修繕されても、中身は壊れている。
触れても、話しかけても、ちっとも反応が無い。

それもそうだ。
こいつは２０年もの間、達磨娼婦だった。

その間に受けた快感、苦痛、凌辱の数は
もはや数えるのも馬鹿らしい量だろう。

大抵の達磨娼婦はその入り口で踏みとどまり
それまでの報酬に満足して、普通の生活に戻っていく。
平均だと、３年くらいで復元手術を受けて辞めるそうだ。

しかしこいつには「普通の身体に戻りたい」
そう思える感情さえ残っていない。

達磨娼婦の下腹部に印字されたコードを
端末で読み込むと、その履歴を見ることができる。

各々の達磨娼婦には、本人の確認の下で
事前に定められた契約約款、改造内容、利用方法がある。

しかし達磨娼婦には、物理的に抵抗する手段がない。
いざ使用されることになってから、過度な行為を行う利用者も中にはいる。
利用中は、どんなに嫌でもその身体に快楽を叩きこまれる。

そのため、達磨娼婦を派遣している会社や俺みたいな各地区の職員は、
「適正な利用」がされているか確認することが出来る様になっているのだ。

最初のデータは……追加で行われた改造の様子だった。

98%

達磨娼婦となる手術、
そして追加で行われる性的機能の拡張は、
全てが無料で受けることが出来る。
これは他の職種と同様に
政府の職業支援プログラムから補助金が出るからだ。
この補助金は規定年数以内で辞めた場合
本人が返済しないといけない。
達磨娼婦の場合は、それが３年。
ただしこれはあくまで基本の数字で、
追加改造でその費用が増せば、その分だけ期間も伸びる。

手にした書類の「改造項目」を見る。
仕事柄、他の達磨娼婦についての書類も
たびたび見ることがあるが、これ程の項目数は見たことが無い。
達磨娼婦でいるべき年数は、１２年。
現在の法制度だと禁止されているほどの改造量。
世の中には同程度の改造を受けている達磨娼婦もいるが
通常は利用されるニーズに応じて、段階的に行うものだ。
どれほど変態な人間も、いざ自分の手足が無くなればそれで満足するか、あるいは後悔する。

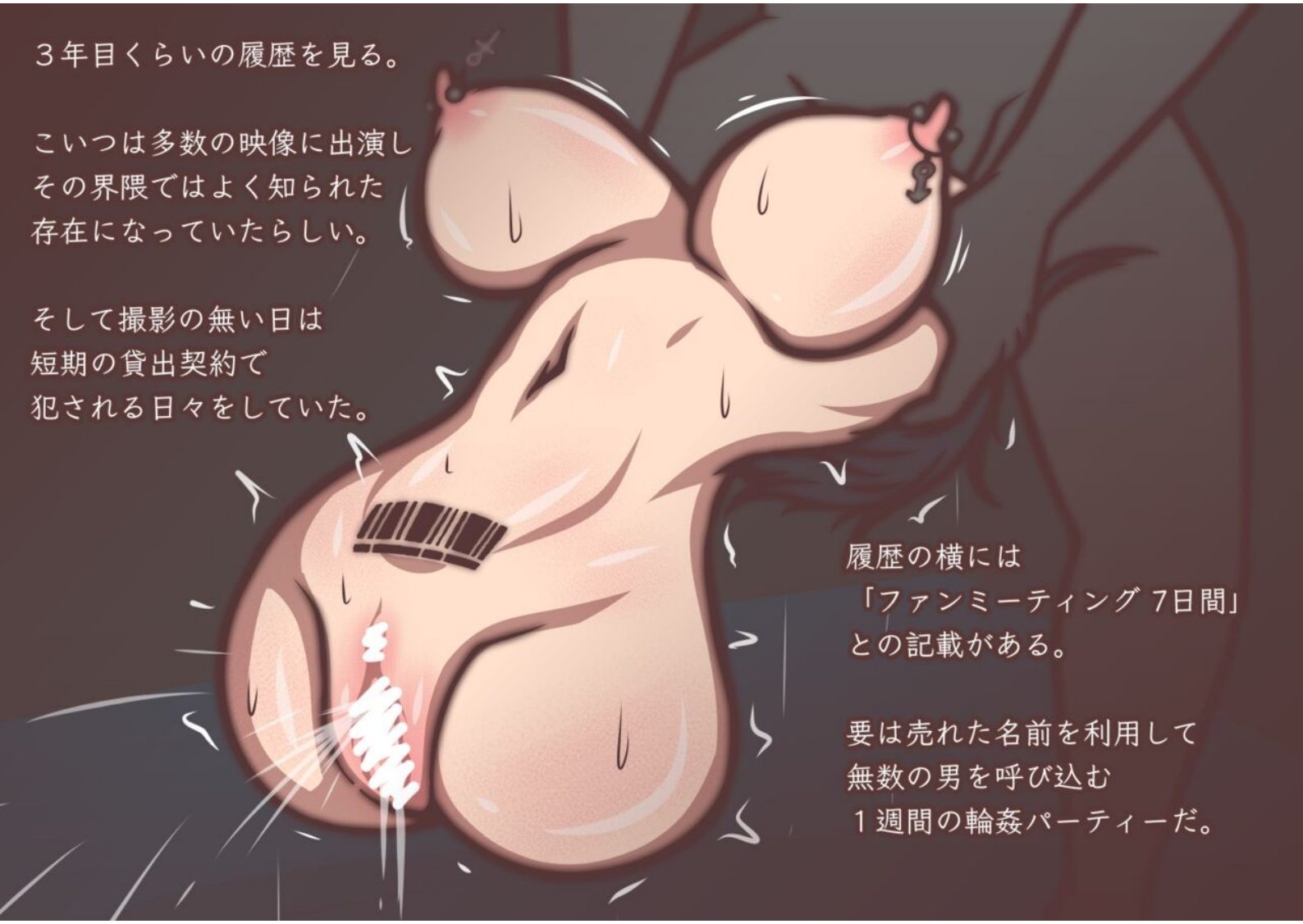
映像が終盤に差し掛かるころには
乳房はバスケットボールほどに大きくなり、
異物に突き刺されて膨らんだ腹部は
もはや中身が人間のそれでは無いことを示していた。
快感を増幅するために、脊椎の中も組み替えられた。
常に続く発情と、増幅してく感度によって
手足があろうと、まともに活動できる状態じゃない。
しかしこれは、この履歴の１ページ目。
達磨娼婦としての仕事は、まだ始まってすらいない。

利用履歴の一番最初は
アダルトビデオの撮影だった。
あまりに多量の改造、
それによる時間経過で
髪が少し伸びている。
ただそれは、買う側の都合であって
買われる達磨娼婦は通常なら
そういった選択はしない。
初物の達磨娼婦には高い値が付く。
過激なプレイを許諾している達磨娼婦なら
さらに値段が上がる。
たいていは待遇の良い
大手企業の性処理係などに
行きたがるものだ。
かなりの金額が動いたことは
想像に難くない。
単に報酬を求めるにしても、
それで十分すぎる。

挿入が始まると
吊り下げられた肉塊は少女の声で鳴いた。
見ようによっては、
嫌がっている風にも受け取れる。
というより、俺にはそうとしか見えない。
ほとんど苦痛と言って良いレベルの快感。
獣のような叫び。
その合間に、初々しさ、驚愕
そして恐怖が混じりあっている。

しかしこの先の利用履歴には
同じメーカーの出演記録が
かなり続いている。
ロープと鎖で吊るされ
身動ぎ一つ出来ぬ状態で
精液を流し込まれ絶頂する。
そんな無様を晒したかった。
見てほしかった。
しかも実名だ。
そういうことなのだろうか？
こいつの知人以外では
俺みたいにこの履歴を見れる
立場じゃなきゃ分からないことだが
映像に付されたそれは源氏名じゃない。

無数の玩具を挿入され、
今度は鞭打ちが行われる。
悲鳴、笑い声、罵る言葉。
水音、玩具の振動音。
やはり俺には
ただ苦しんでいるようにしか見えない。
この履歴を見れば何か分かるかと思ったが、
こいつがこんな選択をした理由
それについての情報は無かった。
もう何十回目と
鞭が振り下ろされるところで
俺は動画の再生を止めて
次の履歴を見ることにした。



３年目くらいの履歴を見る。

こいつは多数の映像に出演し
その界隈ではよく知られた
存在になっていたらしい。

そして撮影の無い日は
短期の貸出契約で
犯される日々をしていた。

履歴の横には
「ファンミーティング 7日間」
との記載がある。

要は売れた名前を利用して
無数の男を呼び込む
１週間の輪姦パーティーだ。

挿入を受け入れ、潮が噴き出す。
口に咥えながら
激しく嗚咽し、叫ぶ。
たぷたぷと揺れる乳房が情欲を誘い
行為が一層激しくなっていく。
何度も腹の肉が痙攣し、
見るだけでその絶頂の激しさが
伝わってくる。
しかしそんな最中にも、
ペニスを舐る音は続いている。

数時間、凌辱と絶頂が続いた。
映像で見ている俺さえ
咽てしまいそうになるほど
股下は精液でドロドロになっている。
しかしそうやって入れ替わり立ち代わり
何度も何度も犯される最中であっても、
こいつは一言も拒絶の言葉を発しなかった。
達磨の身体では何を言っても無意味だと
そう思っているのか。
あるいは、これこそを望んでいたのか…

そうして更に凌辱は続く。

寝る間もなく
泣叫んでは失神し
絶頂してまた起きる。

しかしこの肉塊は
「イヤ」とも「やめて」とも
決して言わない。

ただ無心でペニスを貪る。

この行為をこいつ自信が求めてることに
誰も疑いはしないだろう。

破滅願望の果てに
もはや人間ですらなくなったマゾ女。

ただの道具を使うのに
良心の呵責など必要はない。

８年目。

延々と続いている利用履歴のデータ。
その中で気になったのは、
最後のビデオ出演だった。

題材は、達磨娼婦オークション。
この撮影で、次の契約先を決める
といった趣旨だ。

司会の口から語られる。

この淫売はどの様な凌辱、改造でも
よろこんで受け入れること、

落札後は決して
自ら契約解除をしないこと、

そして、あらゆる人権を放棄すること。

無論これは演出で、
達磨娼婦は法律で保護されている。

隔週１回、達磨娼婦のもとには
担当官が面会をして、
契約の続行などを確認する。

本人が戻りたいといえば
すぐにでも契約は解除、
手足の復元などの手続きが行える

そう、これは演出だ。

しかし、額縁の中で震えるその姿、
半開きのまま動かぬ口元は、
恐怖心のそれにも見える。

競売が始まり、
集まったバイヤーたちが
一斉に手を上げる。
彼らにとって、
競り落とす事は二の次。
その金額が増すごとに
鉄製の額縁はガタガタと揺れ、
達磨娼婦の口元が
苦悶に歪んでいく。
小刻みに値段を進め、
哀れな達磨娼婦が
その声に反応する様子を
楽しんでいる。
その様子にしばしば会場から
嘲笑の声が響き、しばらくして
また幾人かが手を上げる。
そうしてある程度、
金額が上がったところで
絶頂により額縁が激しく揺れた。

司会者が現在の価格を告げる。
先ほどまでの、半分。

このオークションはあくまで
達磨娼婦を苛むためのもの。

ラバーの内にはディルドが仕込まれており、
絶頂の度に値が半分になる。

オークションを終わらせるには、
極限まで感度が高められた
その身体で絶頂を堪えるか、

あるいは自らの価値を
極限まで堕としながら、
絶頂を繰り返し気絶してしまうか。

金額が上がり、２倍ほどになり
絶頂で振出しに戻る。

嘲笑う声とともに値が上がり
絶頂によりさらに安くなる。

見世物用の家畜。

既に使い古された淫売の肉穴など
誰も興味がない。

こうして無様に苦しみ続けることこそ
その存在意義なのだ。

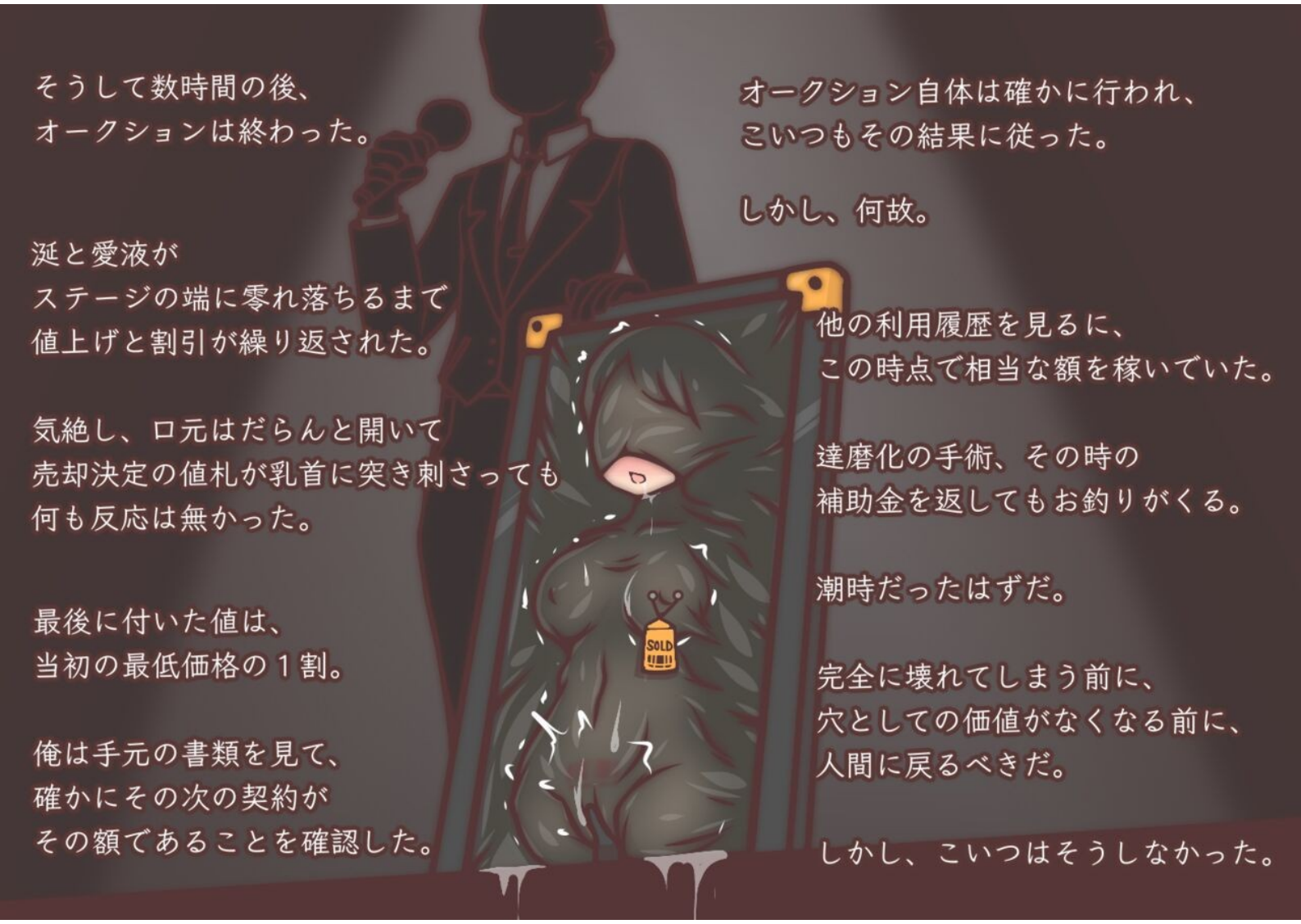
そうして数時間の後、
オークションは終わった。

涎と愛液が
ステージの端に零れ落ちるまで
値上げと割引が繰り返された。

気絶し、口元はだらんと開いて
売却決定の値札が乳首に突き刺さっても
何も反応は無かった。

最後に付いた値は、
当初の最低価格の１割。

俺は手元の書類を見て、
確かにその次の契約が
その額であることを確認した。



オークション自体は確かに行われ、
こいつもその結果に従った。

しかし、何故。

他の利用履歴を見るに、
この時点で相当な額を稼いでいた。

達磨化の手術、その時の
補助金を返してもお釣りがくる。

潮時だったはずだ。

完全に壊れてしまう前に、
穴としての価値がなくなる前に、
人間に戻るべきだ。

しかし、こいつはそうしなかった。

そこから数年間の記録は、見るに堪えないものばかりだった。

既に何年も達磨娼婦でいるような、真正の変態女。
その上、その身体は過酷な凌辱を受けるための種々の改造を施されている。

普通の倍ほど水に沈めても、汚物を食べさせても、
多少蹴っても殴っても、死んだりなんかしない。

———いや、出来ない。
達磨娼婦の身体では、死ぬ自由さえない。
臓器は最先端医療の塊。舌を噛もうにも、歯は全てフェラチオ用の軟性素材だ。

そして何より、こいつにはその地獄から出ようとする意思が無かった。
複数の担当官が、数年の間に何百回と面談と確認をしている。

そんな奴を、破滅主義の家畜を、人間はどう扱うのか。
考えてみれば、想像する必要さえなかった。

１３年目。

利用履歴の内、利用者に関する情報が
赤く表示されているものが２つあった。

何らかの事由で、達磨娼婦の派遣先として
不適切となった人物。その利用履歴。

その一人目は、
現在では刑事犯として服役している男だ。

家具職人。

５年前の逮捕のニュースを見るに、
男はそう呼ばれていたらしい。

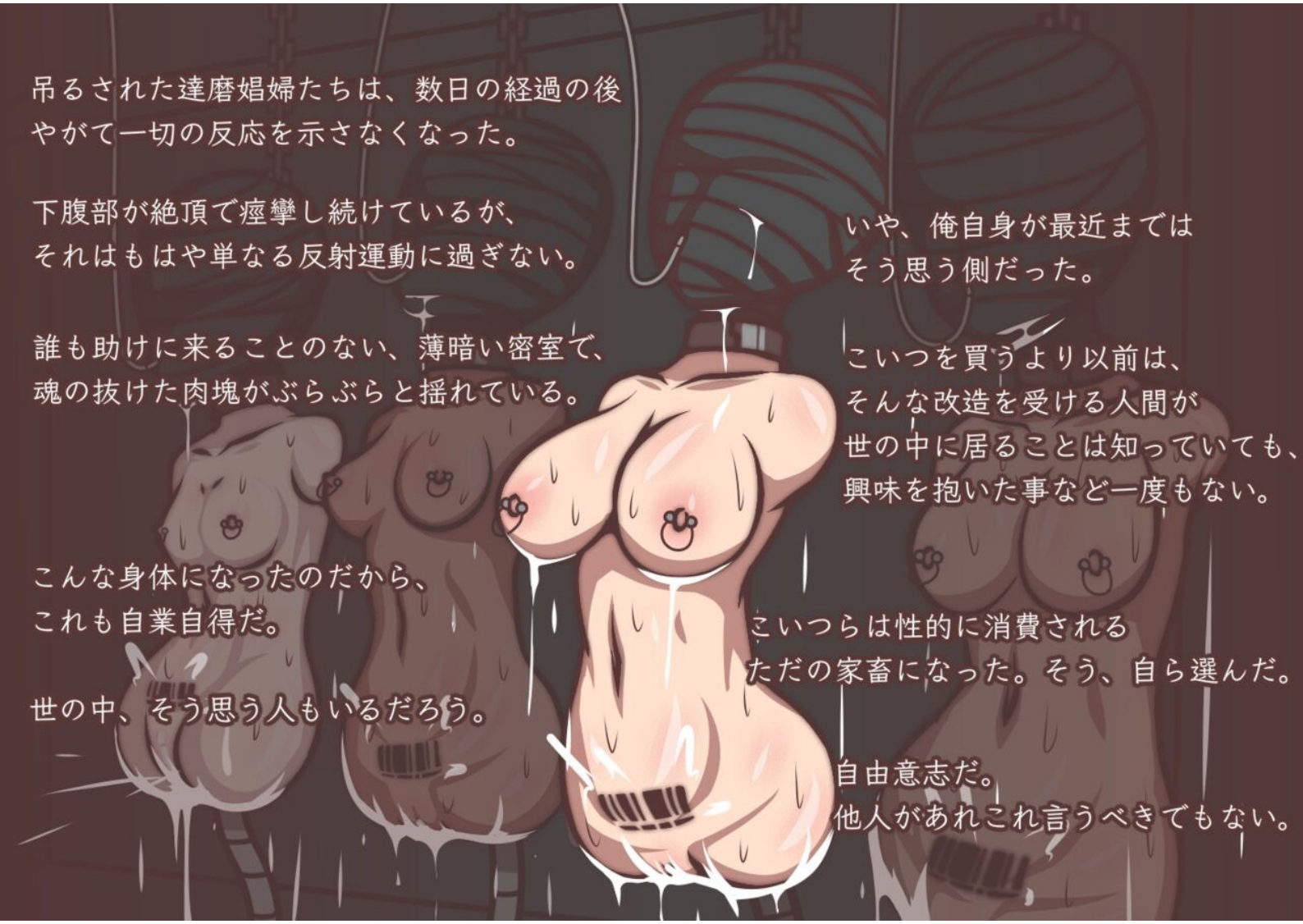
買い付けた達磨娼婦を
壊し、あるいは洗脳し、

公的に認められていない
改造を行った後に、
自身の作品として売りさばく。

男はその地区の担当官を抱き込んでいて
数十人の達磨娼婦が被害に遭った。

こいつは、その一人だったらしい。

それはある意味では当然の結果だった。
性処理のために生きる肉穴。
そこに関わる者がまともである訳がない。
中には、逸脱した行為に及ぶ人物も居る。
そして、達磨娼婦を壊すのは容易い。
常に発情し続ける身体は
何らかの刺激なくして保てない。
呼吸と食事の管を挿し込み
五感を封じる。
あとは、ただ待っているだけで
自家中毒に陥る。
身体の防衛反応か、
激しい潮吹きが繰り返される。
しかし、発情を促す物質
その蓄積の方が早い。
やがては空気に触れるだけで、
絶頂するほどにまでなってしまう。
そして、そうなってさえ
やはり死ぬことだけは出来ない。



吊るされた達磨娼婦たちは、数日の経過の後
やがて一切の反応を示さなくなった。

下腹部が絶頂で痙攣し続けているが、
それはもはや単なる反射運動に過ぎない。

誰も助けに来ることのない、薄暗い密室で、
魂の抜けた肉塊がぶらぶらと揺れている。

こんな身体になったのだから、
これも自業自得だ。

世の中、そう思う人もいるだろう。

いや、俺自身が最近までは
そう思う側だった。

こいつを買うより以前は、
そんな改造を受ける人間が
世の中に居ることは知っていても、
興味を抱いた事など一度もない。

こいつらは性的に消費される
ただの家畜になった。そう、自ら選んだ。

自由意志だ。
他人があれこれ言うべきでもない。

……しかし、今となっては俺の意見は違う。
本人が望めば社会が認めれば、何をしても良い、そんな訳が無い。

達磨娼婦は家畜で、ただの肉穴。性処理の道具。
しかしやはりそれは人間で、そこに関わる人がいる。
こいつだって、そうだった。

だが、そう考えたところで今さら手遅れだ。
俺がのうのうと日常を過ごす間に、こいつは犯され、辱められ、壊れて、
そしてもう元には戻せない。

あるいは、最初から壊れていたのか。
それを確認する術もない。

１３年と半年。
家具職人の男から
売り払われたこいつは、
郊外にある屋敷の中庭に設置された。
口から肛門は一直線になるよう
簡素化されている。
串刺しになった状態で、
その体重は膣内に突き刺さる
振動する金具で支えられる。
淫らに震え続ける、日時計。
２４時間、休みなく、
異物が身体を貫き続ける。
最後まで残っていた
言葉を発する自由も
容赦なく奪われた。
この絶頂地獄のゴールは、
利用者が飽きるか、または死ぬか。

雨ざらしの屋外で、
どれほどの時間が過ぎようと
串刺しの状態は続く。
各所の臓器改造で、
達磨娼婦は病気にならない。
なれない、死ねない。
老化もしない。
その寿命は理論値に近い。
出来ることは、快感に悶えることのみ。
日の光にあぶられ、
風と雨粒に愛撫され、
時折飛び寄る野鳥や羽虫に
触れられ、絶頂する。
そこにあるのは
0か1かの電気信号だけ。
魂の無い、
肉塊で作られたオブジェ。

既に懲戒された担当官の名で
書類にサインがされている。
事が露見するまでは
こんな状態でも「違反なし」
という事になっていた。
本人確認の項目は
完全に虚偽の記載だ。
串刺しの絶頂状態のまま
何を確認できるというのか。
豪雨の中、雨に打たれ
身体を震わせ絶頂している。
震え、潮を噴き、
悶え苦しみながら
悦んでいる。
契約内容に合致。
異常はありません。
利用を継続。
違う。こうすること以外
こいつには出来なかった。

――１８年目。
尿道から潮が。
膣内からは愛液が。
改造された粘膜が
その機能として汁を分泌する。
下腹部の筋肉が、
自動で痙攣し、絶頂する。
それらの感覚を受け取る意識は、
もうどこにもない。
映像に付された日付を見る。
この数日後に屋敷の主人である
利用者の男は事故で死んだ。
まったくの偶然だ。
その事故が無ければ、
こいつはこのまま置かれ、
伸びた髪は台座の根元まで
届いていただろう。
そして更に２週間後。
担当官の不正が発覚し
こいつは台座から降ろされた。

それからしばらくして、こいつはとある事業者に貸し出された。

身体の復元手術をしようにも、本人の意思確認が必須。
そしてこいつには、その「意思」がない。
親族からは勘当されていて、連絡も付かない。

結局、新たに来た担当官はこいつを持て余したあげく、
比較的条件が良い利用先を見つけ、送り出したのだった。

そしてその利用先の企業は、俺が務めている市役所の管轄内。
普段の業務の最中に、俺はこいつの名前を見つけた。

間もなくして、俺は購入を決意した。

アイマスクを外す。
眩しがる様子もなく、どこにも焦点の合わない視線が宙を漂っている。
名前を呼んでみる。反応なし。
それとも、それが自分の名前だという認識自体、
もう残ってないのだろうか。
「マゾ」とか「オナホ」とか
この２０年で呼ばれ続けただろう。
こちらがそう言えば、
何か返してくるだろうか？
馬鹿な。
あまりにくだらない発想を一笑に伏す。
それにしたって、どうしてこんなことになってしまったのだろう。

俺の中の認識では、
こいつは隣家に住む、地味な女の子だった。

たかだか数か月先に生まれたからって
お姉さんぶって俺の勉強を見ようとする、
そんなお節介なやつ。

俺より成績の良い高校に行って、
それからは朝、玄関前で見かける。
その程度の関係性。

好きだった訳でもない。
子供の頃からそこに居るのが当然で、
それが俺にとっての日常だった。

どうしてこうなった？

このデータが正しいなら、
こいつは卒業式の日、その帰りに
達磨娼婦の施術を受けに行った。
そういうことになる。

とてもそんな、
馬鹿な真似をする奴じゃない。

けれども、ある日いきなり隣が引っ越して
連絡が付かなかった事には説明がつく。

でも、理由は何だ？わからない。
誰かに脅された？調べようがない。

それとも、２０年前のあの頃から。

こいつは破滅的な願望を持った
変態女だった、という事なのか。

だとしても、俺は何も気が付かなかった。

最後に顔を見たのは、
卒業式の日の朝。
お互い、それぞれの学校に向かう時だ。

その時も、いつもと同じだった。

頭が痛くなるくらい、
記憶の隅から隅まで思い返す。

けれども、それらしい兆候は
どこにも見当たらない。

原因らしい事柄も
思い出せそうにない。

分からない、どうして。

もしかして、俺が悪いのか？
分からない。

「――――――――――――――――――――お」
久々に声を聞いた。
だがそれは、あくまで肺と喉が出してる音に過ぎない。
性的に刺激してみれば、何か反応があるかも。
そう思い、不慣れな指先を動かす。
期待はしていなかったが、
脊髄反射として以上は何も無い。
「お、お――――あっ――――」
僅かな刺激で絶頂し、体液を零す。壊れた肉穴。
顔と名前が同じなだけ、全くの他人ではないのか。
記憶との齟齬が余りにも大きくて、眩暈がしてくる。

しばらくして、俺は両腕の痛みで我に返った。
無心になって愛撫を続けていたせいだ。
ベッドはぐっしょりと濡れていて、シーツは取り換えなくちゃいけない。

「————も、あ」

呟くような声を聞いてその顔を見ると
初めて互いの目線が合った。

……もの惜しげな表情をしている。

そこに感情のようなものがある、
俺がそう思いたいだけかもしれない。

しかし、続けてみよう。

達磨娼婦の発情し続ける身体。
その為に用意した小道具を
一つひとつ試してみる。
乳首に、乳房に。
クリトリスと、性器の内側。
アナルの奥まで。
尿道は…怖いのでやめた。
玩具による刺激、絶頂。
機械的な反応だけが返ってくる。
先ほど感じたような変化は
残念だが無かった。
やっぱり、だめか。
今日は疲れた。
俺は諦めて、片付けにかかる。
股下を拭く前に、まずは
愛液を掻き出さなきゃいけない。
「――――う――――ぁ――」
指先で触れると、
それらしい反応があった。
人肌が良い、ということか？
……気乗りはしない。
そんなつもりで
こいつを買った訳じゃない。
けれど、もしかしたら。

柔かな尻肉の間に、腰を押し込む。
熱く熟した肉襞が左右から
ぎゅうぎゅうと絞めつけてくる。
「あー……、あっ――――」
視線がまた合わさる。
少し困ったような、困惑するような
そんな顔付き。そう見える。
これを続ければ、こいつの意識も…
しかし、やはり
見知った顔の相手を
こんな形で犯すのは気が引ける。
ペニスを引き抜こうとする。
しかしそうすると
追い縋るように
肉襞が吸い付いてくる。
強烈な刺激に耐えられず
もう一度押し込む。
「あー、あっ……――――」
でも、やっぱり。
そんな葛藤は、次第に激しい
ピストンへと変わっていく……。

頭がくらくらする。

犯そう、そう覚悟を決める前に
一気にあおった缶ビールのせいか。

あるいは年甲斐もなく
こうして腰を振り続けてるせいか。

どっちだっていい。
続けよう。

腰を突き出す。
子宮口が亀頭を舐る。

体重を乗せ、叩きつける様に犯す。
大きな乳房が揺れる。

そんな行為の最中
額に汗が流れ、目に入った。

沁みる。視界が歪む。
掌で拭おうとする。

「――くん、ごめんね」

その瞬間。
あの頃の声色で、そう聞こえた。

急いで目元を拭った。

けれどそこに居たのは
快楽で呆けた、ただの肉塊だった。

ペニスを絞めつけ、精を貪ろうとする。
それ以外には何もできない、肉の穴。
壊れてしまった達磨娼婦。

これが現実だ。

「あー、あ゛っ、あぁ……オ゛❤」

だが、俺には…
こいつが幸せそうに、見える。

いいよ、分かった。
元に戻らなくたっていい。

俺はこいつを、
使って、使って、
使い潰すことにした。

それがこいつの、
選択なんだから。

「お、あああああーっ❤
んアあああああああぁっ❤❤」

END

小説読むにあたっては、主観で描かれた文章が好きです。
客観だとどうも没入感が無い…。

なので、僕が書く文章もまた、基本は主観です。

とはいえマゾ受けからの視点ばっかりで描いてるので
たまには観測者として「俺」を置いて…

え、なにこれ。NTR？

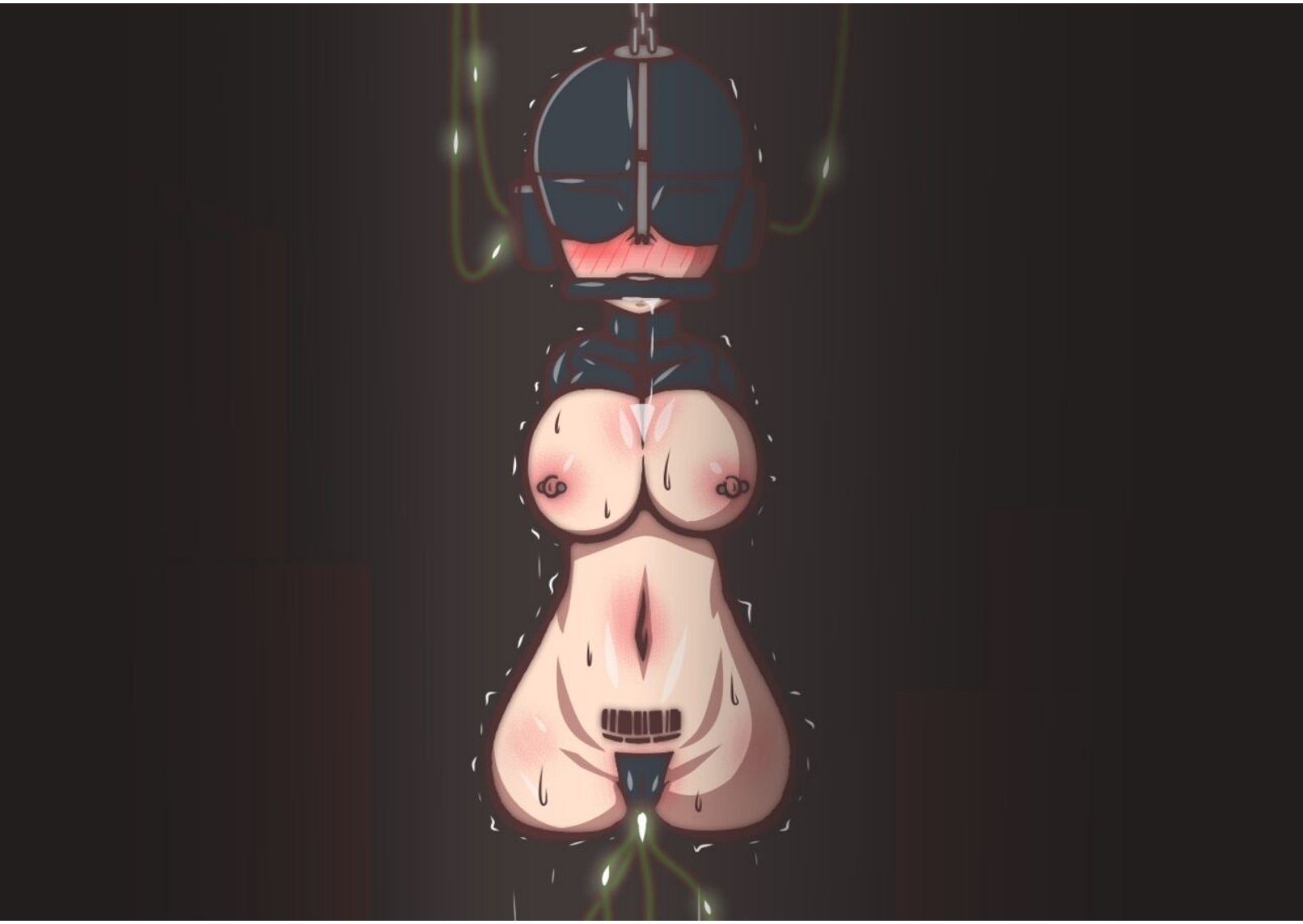
いや、違うよな……うん。

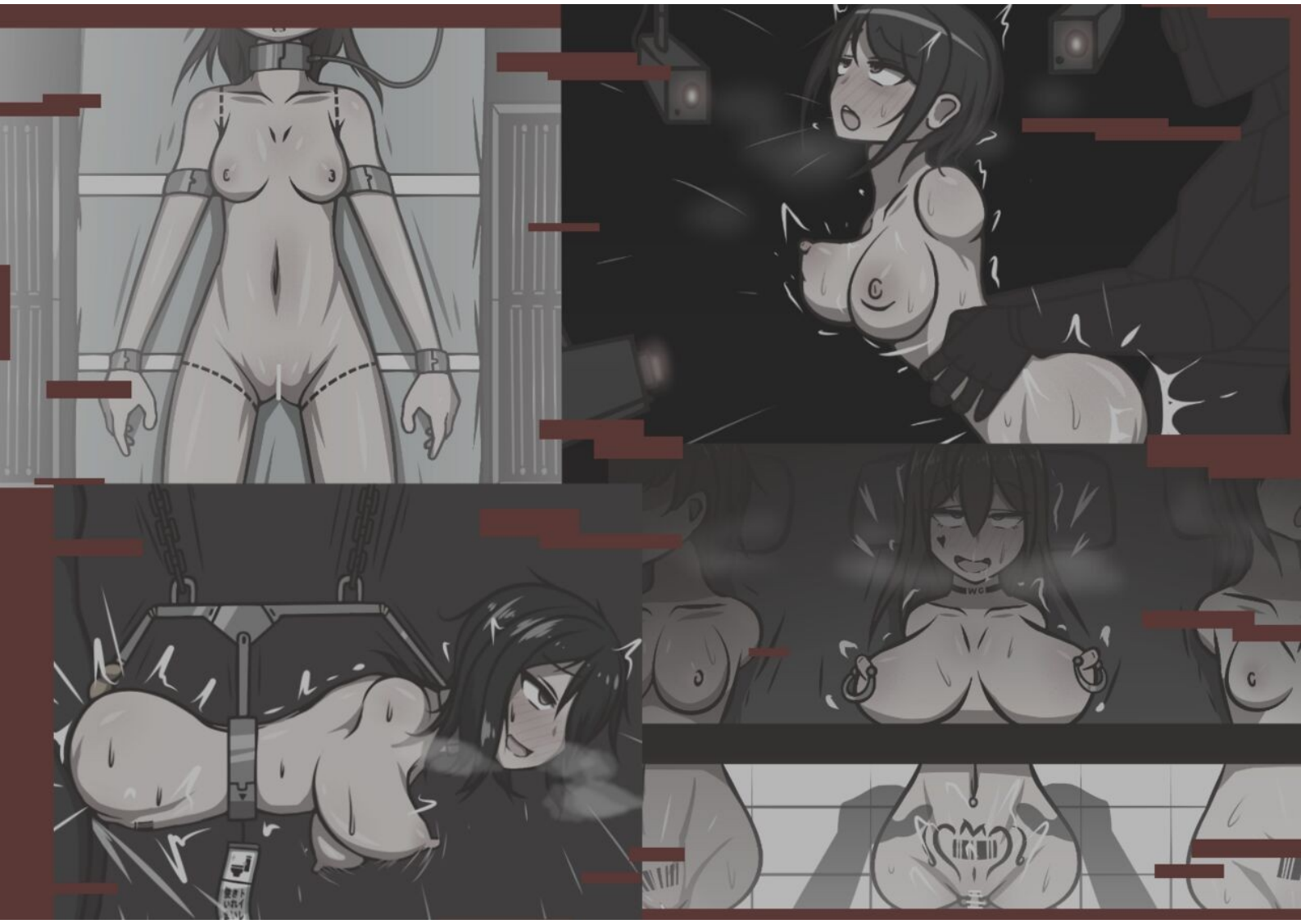
そんな訳で今回は
ちょっと不快な終わり方してるかもしれません。
すまんの。

さて、作業が順調に進めば
次の作品はうちのこミニRPGになりそうです。
順調に進めば、ね……ふふふ、あはは

まぁ頑張ります。そん時はよろしく。

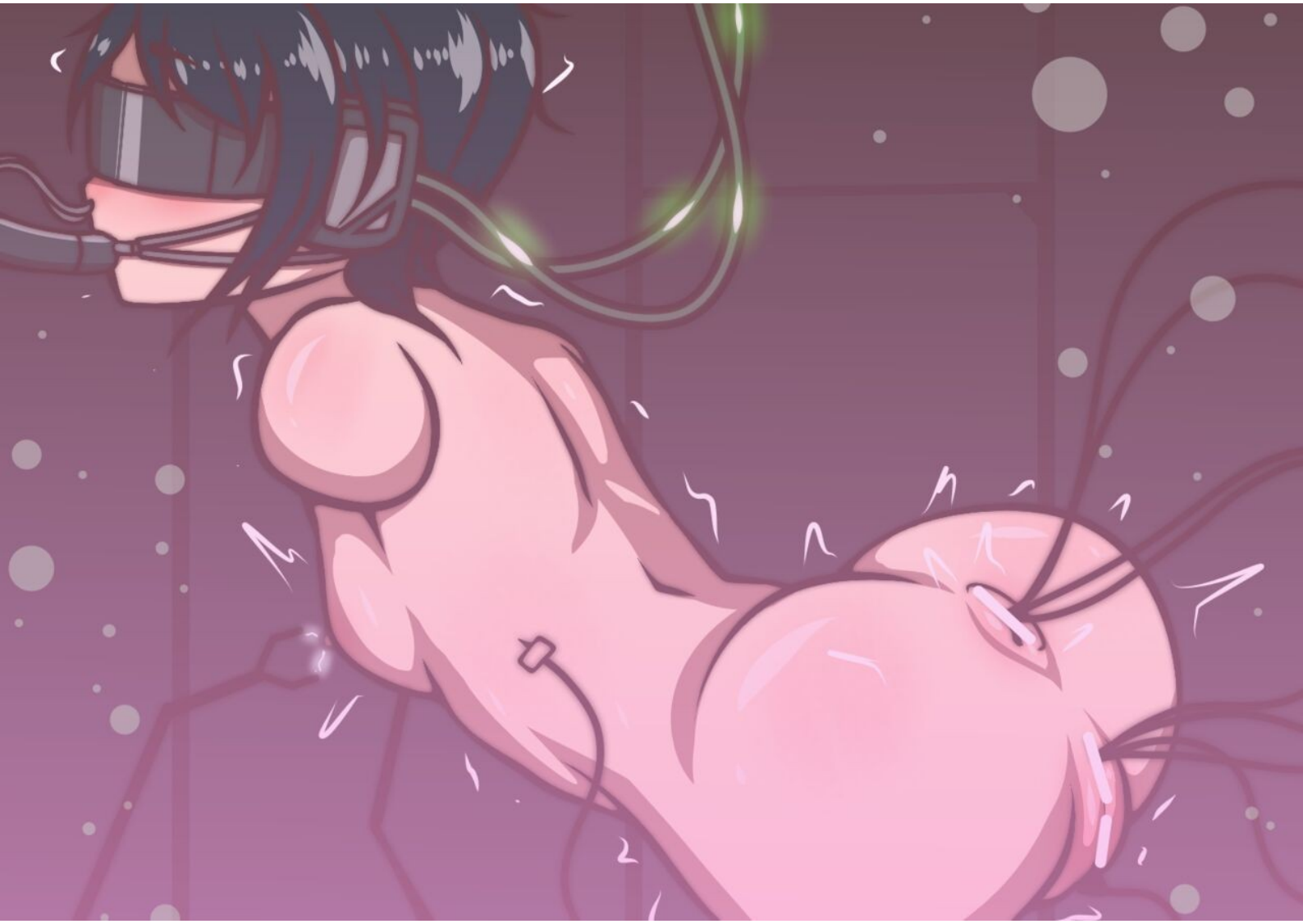
HANA

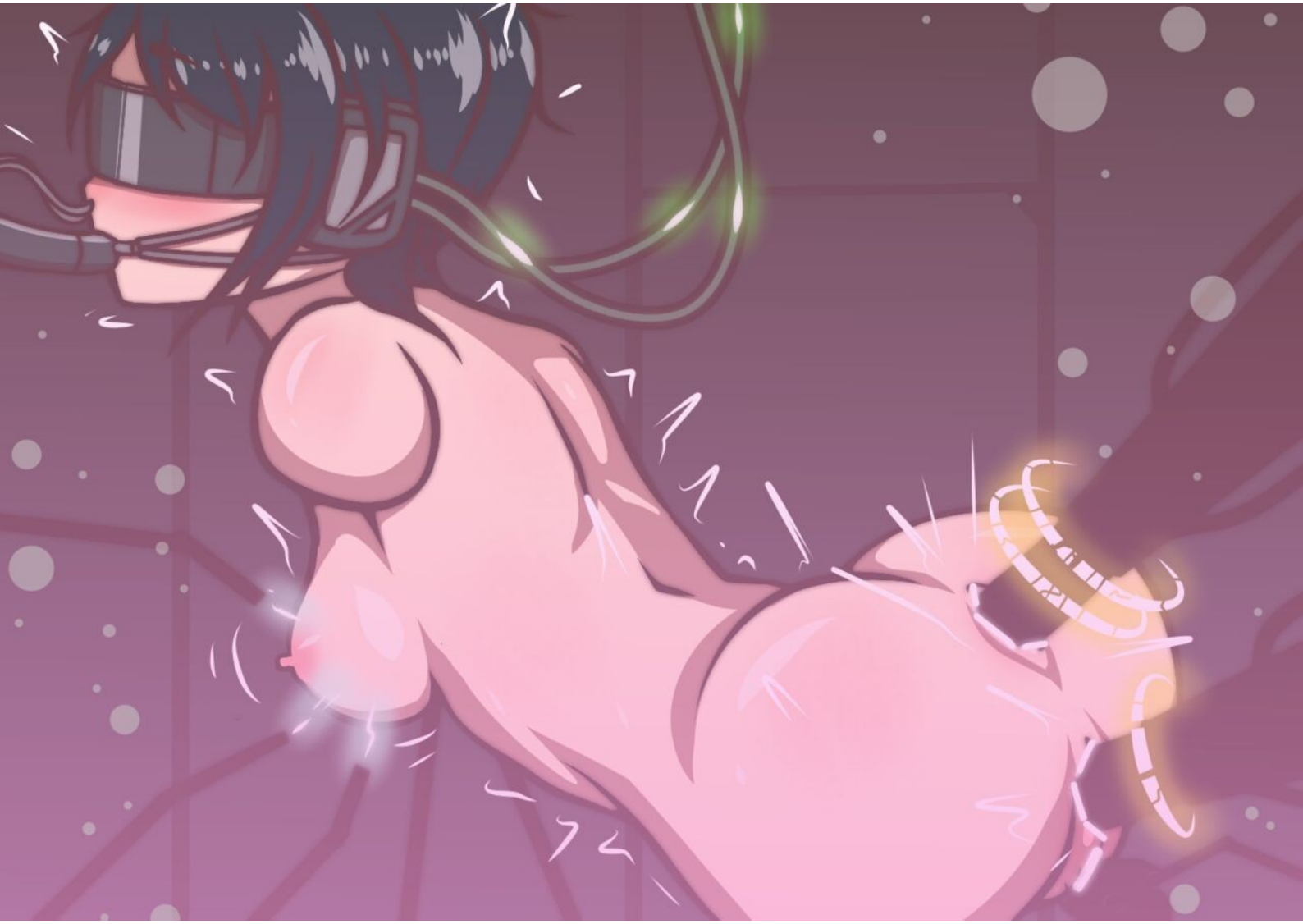




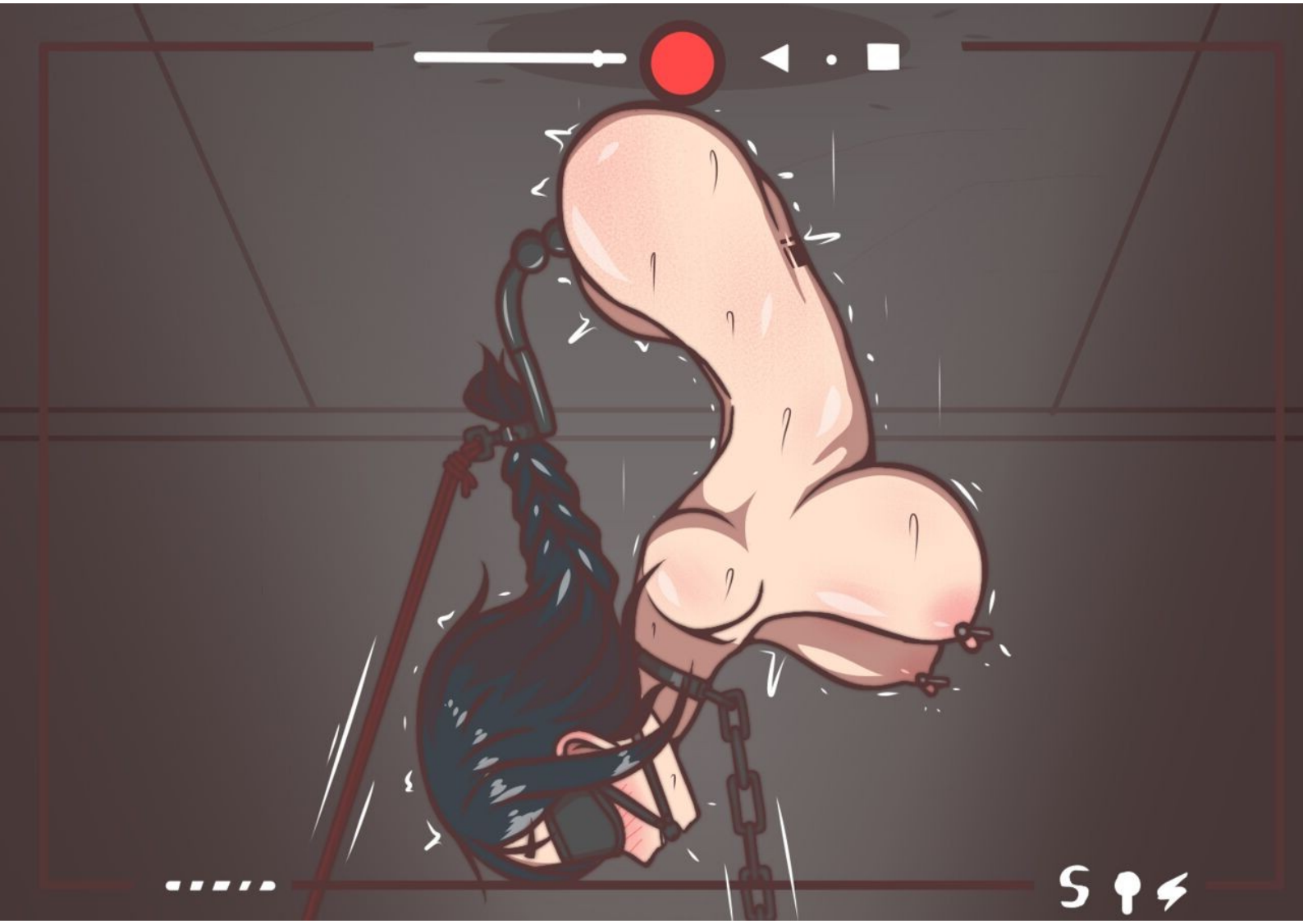
80

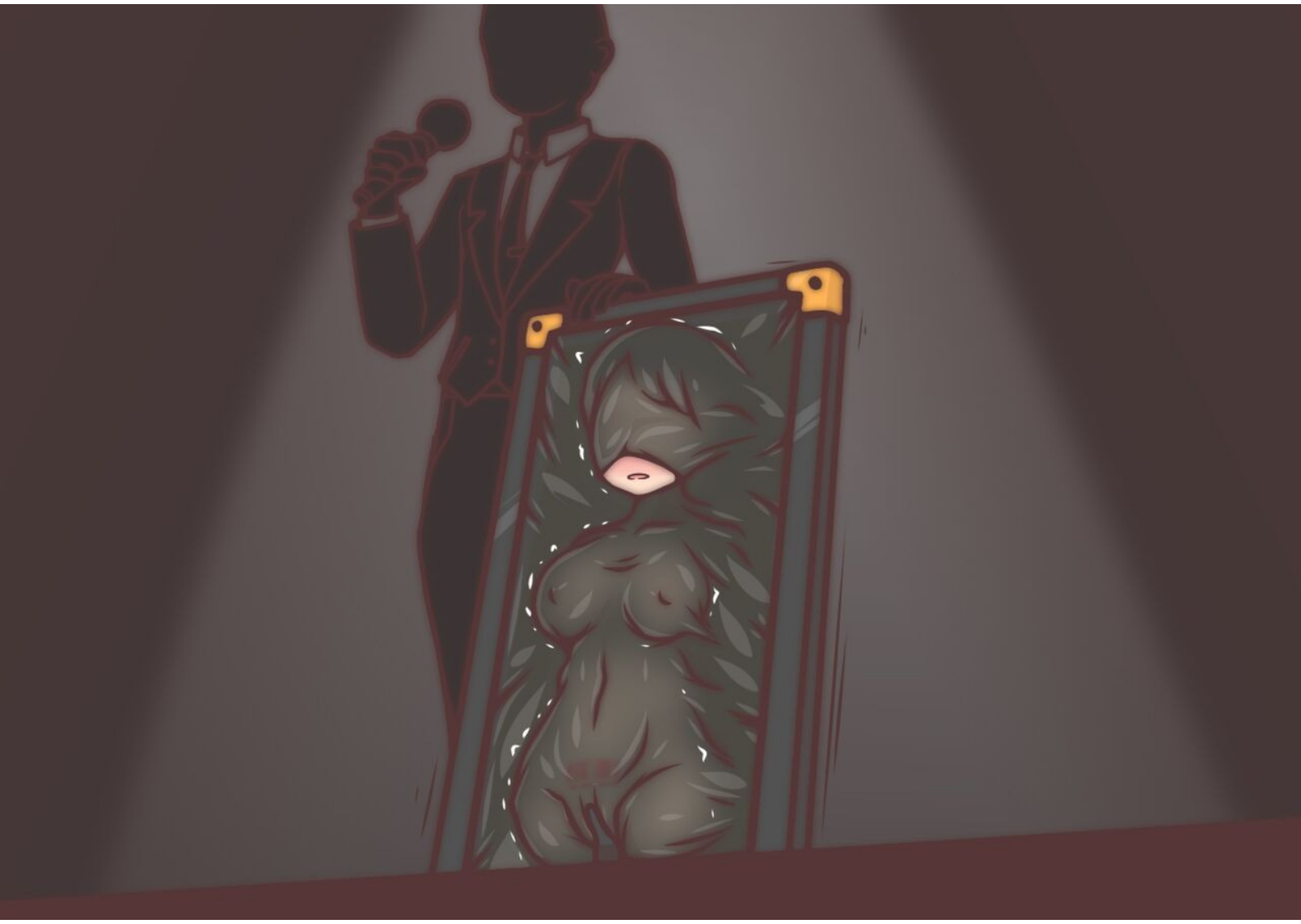
取り扱

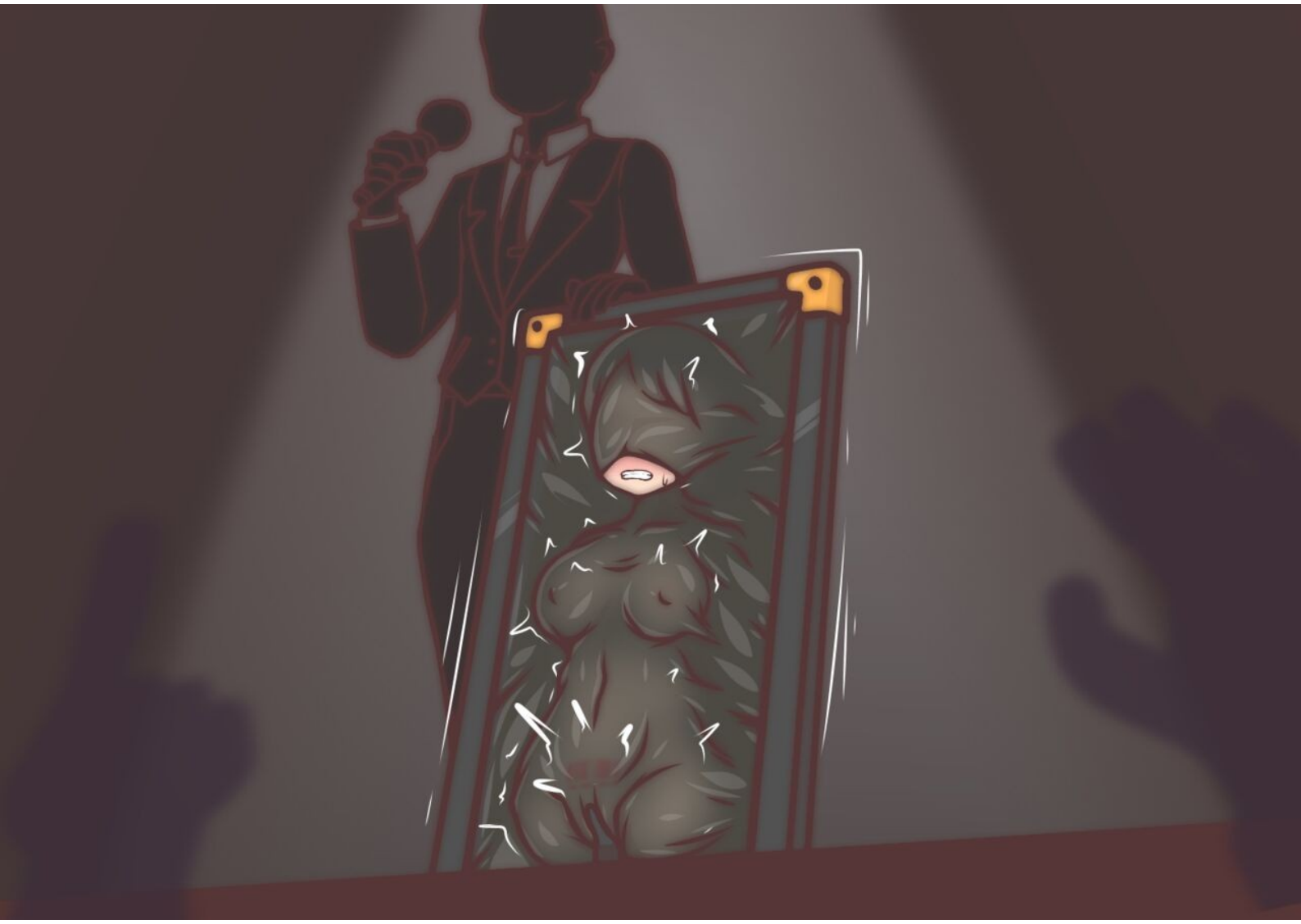


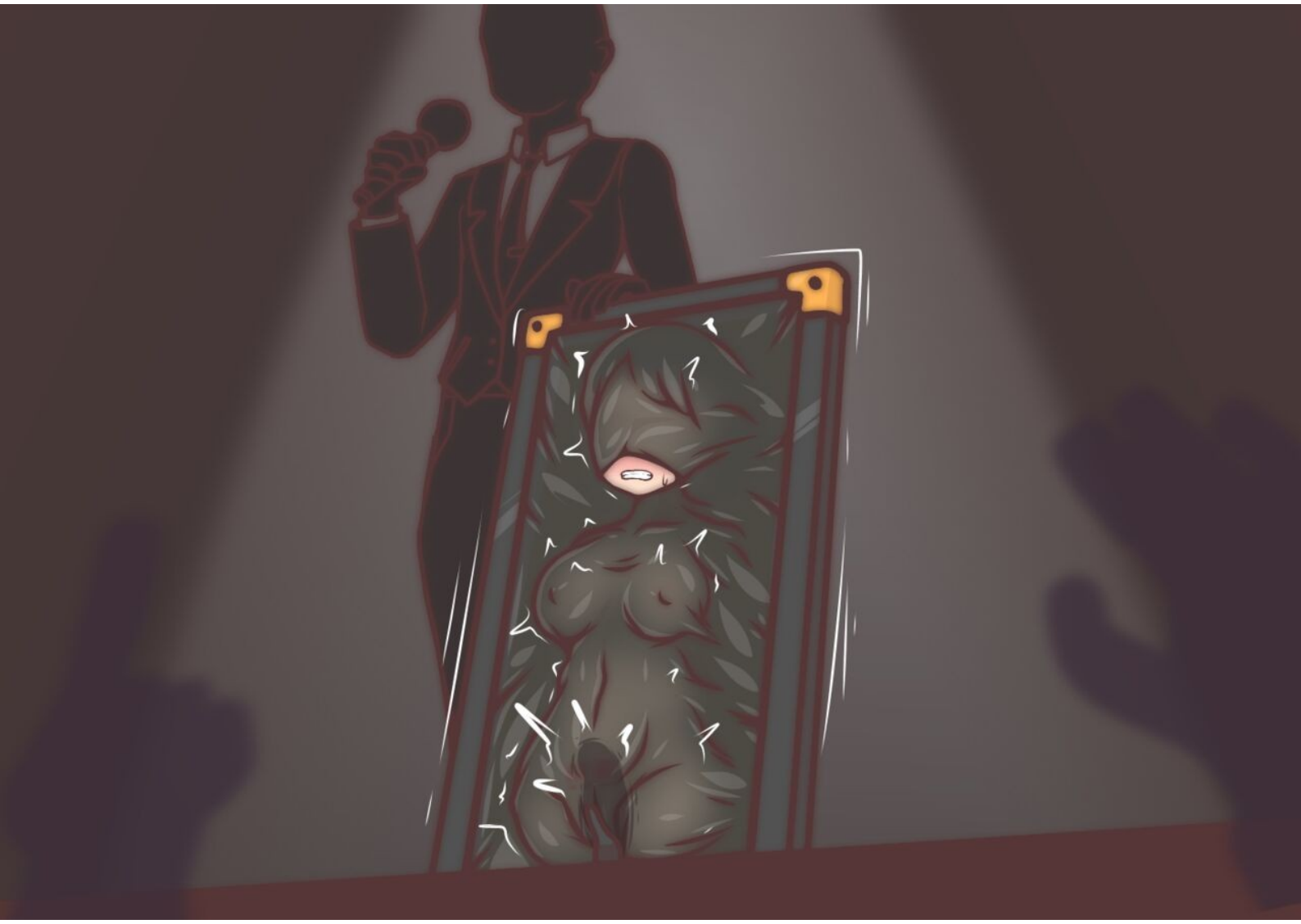


W.C.

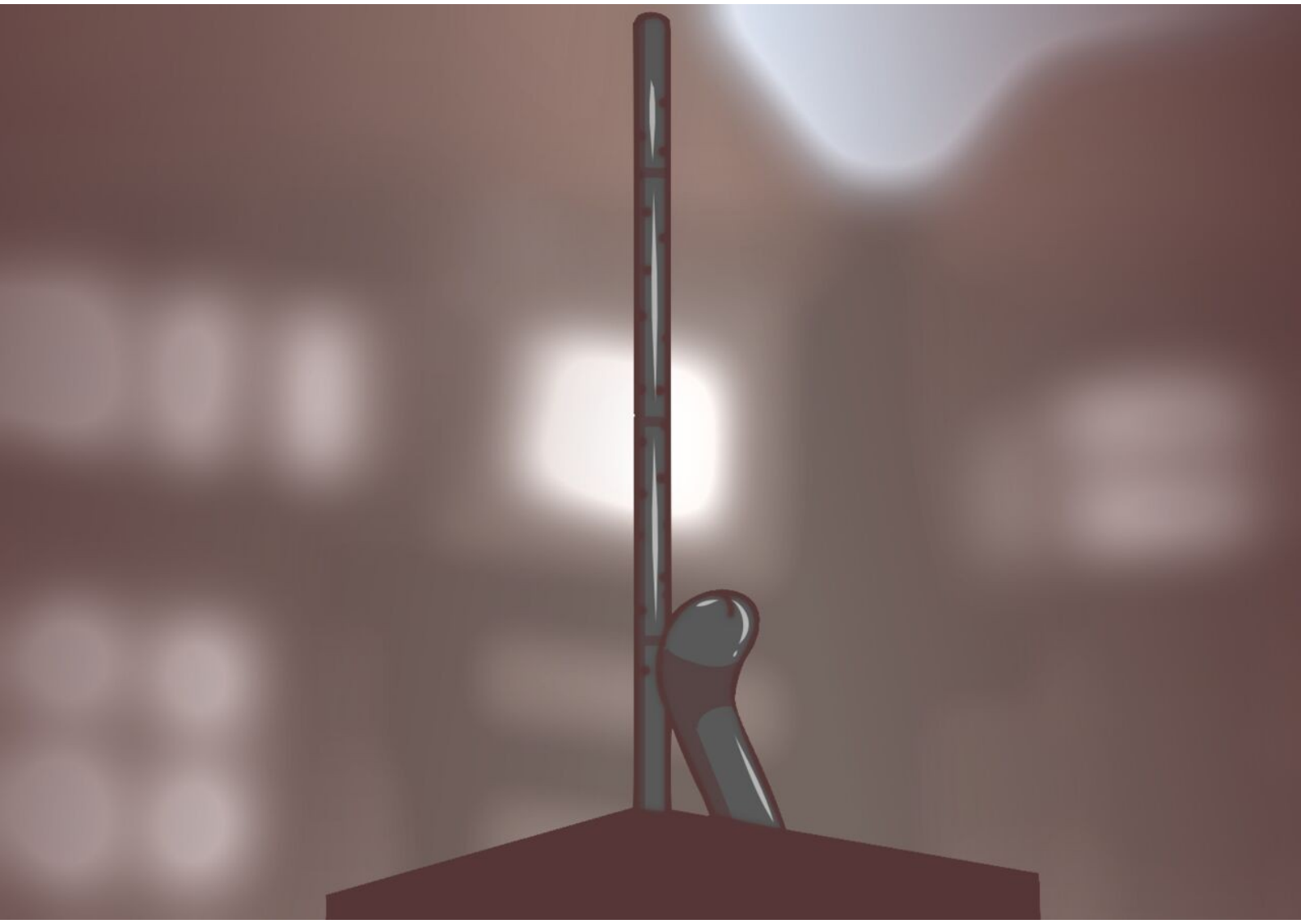


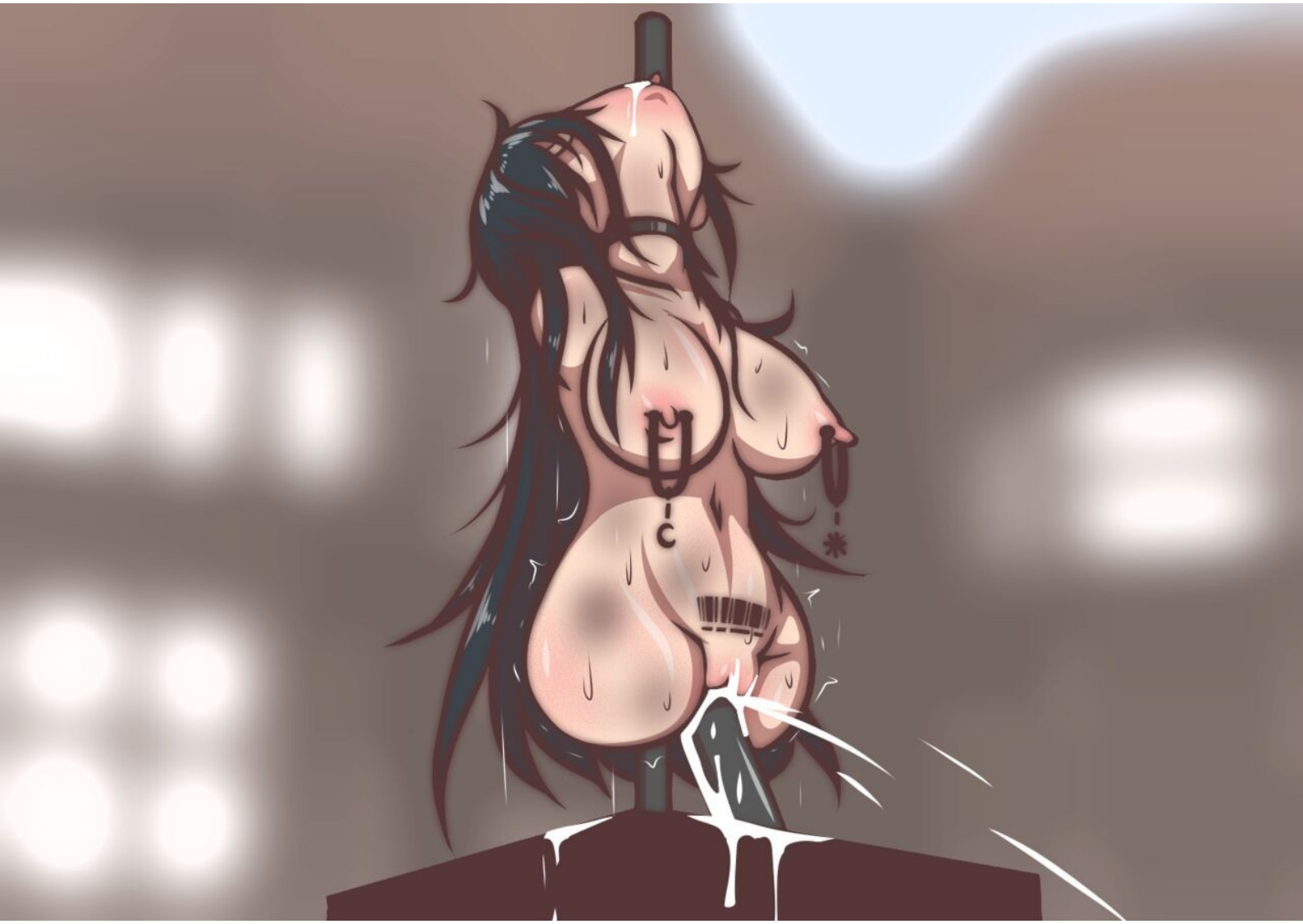




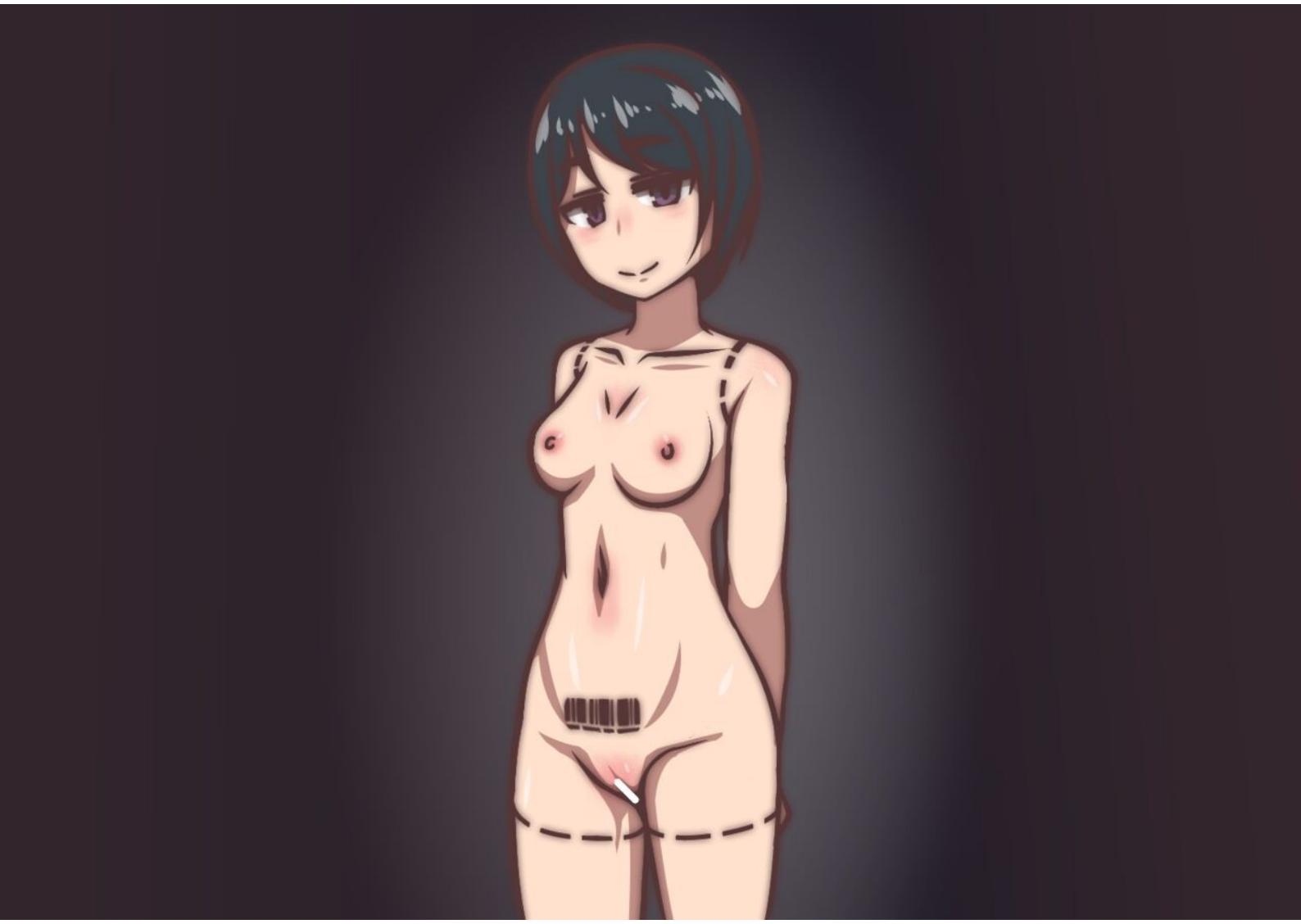


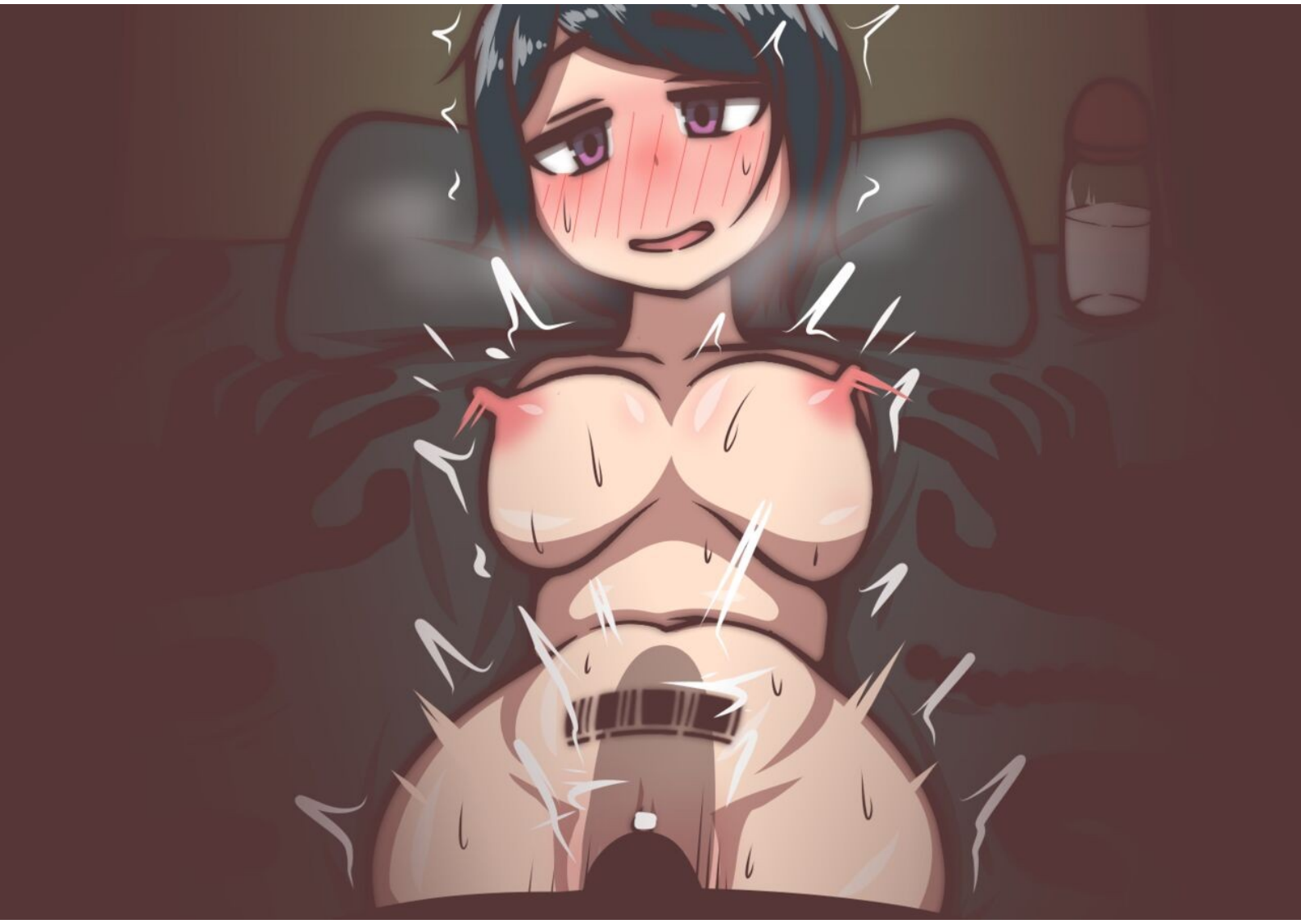
SOLD





取り扱



取り扱

取り扱